

日米修好通商条約の使節団（米軍艦「ポータハン」に乗艦）の 隋伴艦として太平洋を初めて横断した咸臨丸



太平洋の荒波に翻弄される咸臨丸

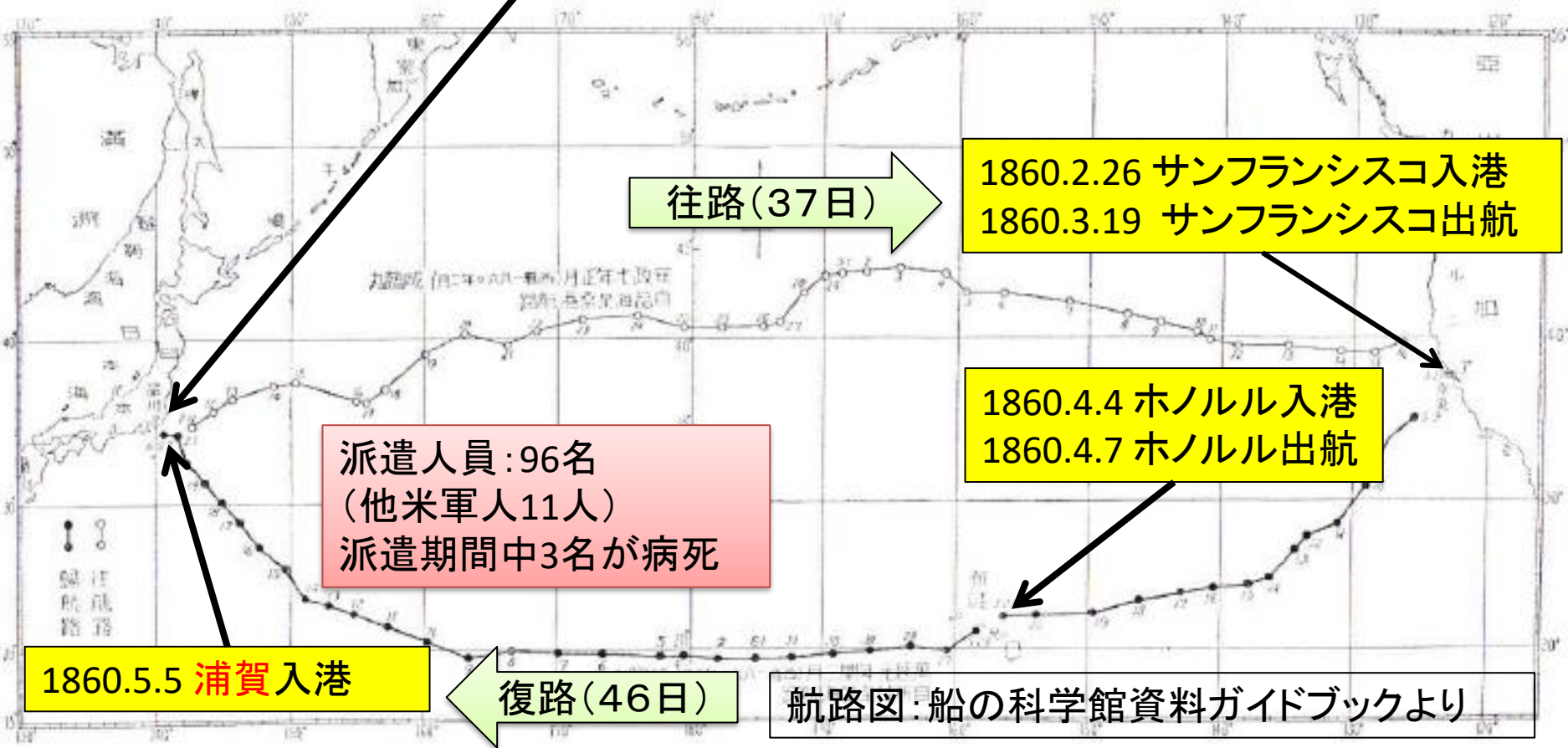
鳳凰丸建造のため浦賀にでき
たドックで、咸臨丸は初めての太
平洋横断に備えて浦賀で修理を
実施し、浦賀から出港します。

咸臨丸には艦長として勝海舟、
また福沢諭吉も乗艦しています。

浦賀での色々な逸話もあるよう
です。

1857.8 オランダで建造され喜望峰回りで約5か月かけて長崎に到着
 1859.2~9 浦賀(日本初のドック)で修理
 1859.11.24 日米友好使節団の随伴艦として決定
 1860.1.17 最終真水、生糧品搭載のため浦賀に入港
 1860.1.19 浦賀を米国に向け出港

1856年 太平洋航路
 開拓される



“咸臨丸”太平洋航程図。復航、5月10日の位置記入が間違っただためハワイ到着まで1日づつずれている。「幕末軍艦咸臨丸」より

太平洋横断時に、士官として乗船した鈴藤裕次郎が、帰国後に“咸臨丸”の難航する姿を描き、敬愛する木村摂津守に送った絵画です。激しい波と嵐に翻弄され、ストームセールで“咸臨丸”の姿が描かれており、苦悩の航海の様子を今日に伝えています。残念ながら原画は失われていました。写真：横浜開港資料館



掃海艇
全長60m
排水量570ト



咸臨丸
全長約50m
排水量約600ト

サンフランシスコに入港する咸臨丸のイラスト スクリューで機走中

幕府水軍御船手組を示す中黒長旗

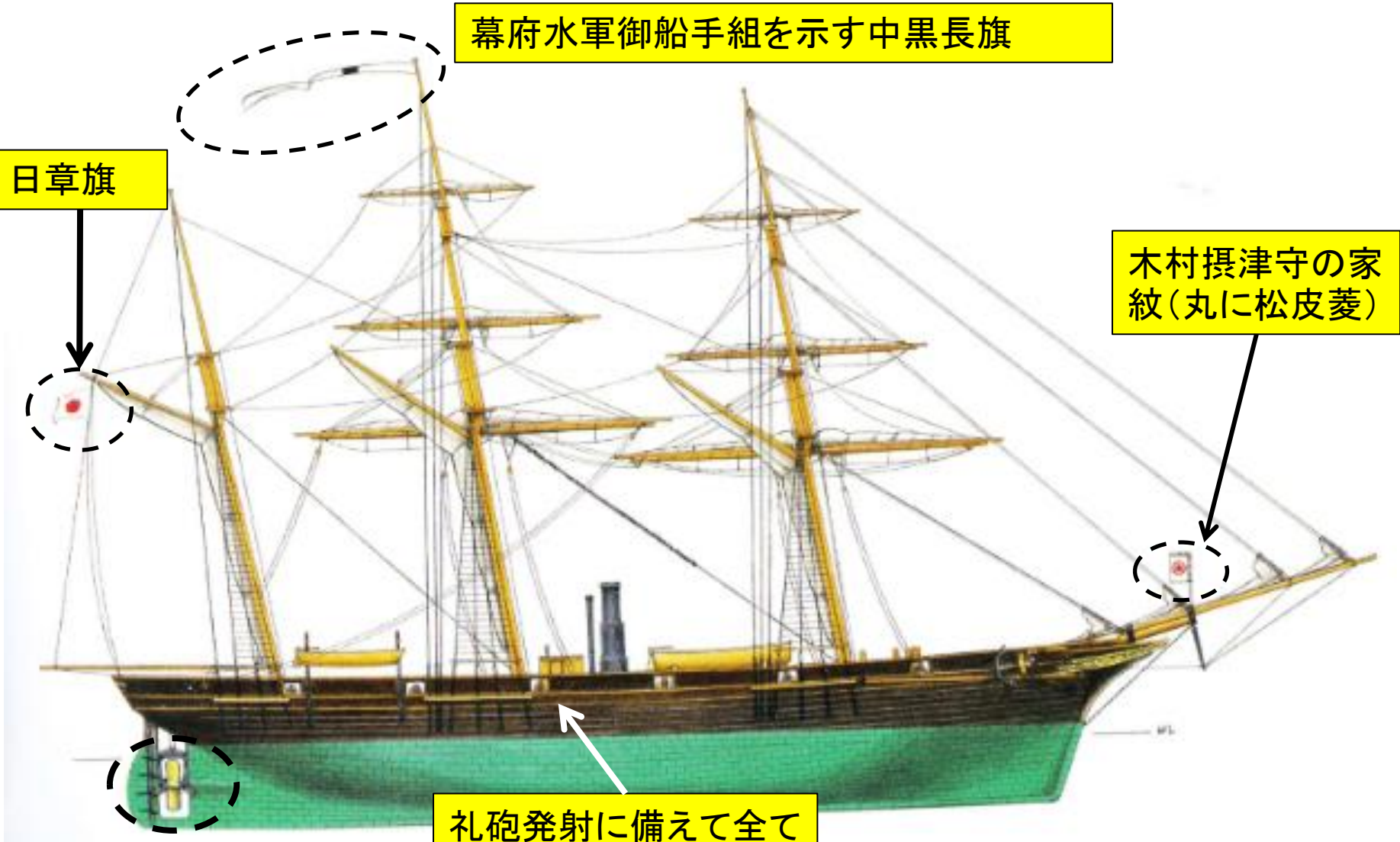
日章旗

木村摂津守の家紋(丸に松皮菱)

機走中のスクリュー

礼砲発射に備えて全ての砲門は開いている

船の科学館資料ガイドブックより



咸臨丸はオランダで建造され喜望峰回りで約5か月かけて1857年長崎に到着します。

“咸臨丸” 内部精密解剖図



船の科学館資料ガイドブックより



- ① 煙突格子
- ② 火焚(石炭投入)
- ③ ファンネル(特種式煙突)
- ④ ボイラ(左右2基)
- ⑤ 転倒式蒸気管
- ⑥ 調理室
- ⑦ メインマスト(主楯)
- ⑧ 機関士居室(高板)
- ⑨ ターンバックル
- ⑩ スカイライト(天窗)

- ⑪ フォアマスト(前楯)
- ⑫ ハンモック(吊床)
- ⑬ 水夫・火焚 居室
- ⑭ 積積庫
- ⑮ 砲弾庫
- ⑯ 水タンク(24個)
- ⑰ 糧食庫(両舷側)
- ⑱ 密蔵庫(中央)
- ⑲ 薪炭口
- ⑳ 石炭庫

- ① 便所 (左舷)
- ② 後部乗降口
- ③ 銃器庫 (右舷) / 衣類庫 (左舷)
- ④ 銅板張りの外板
- ⑤ スクリュープロペラ
- ⑥ 引上げ式のプロペラ
- ⑦ ラダー (舵)

- ⑧ プロペラ軸駆動レバー
- ⑨ ミズンマスト (後檣)
- ⑩ 操舵輪
- ⑪ 艦長・将官公室 (中央)
- ⑫ 艦長・将官居室 (両舷)

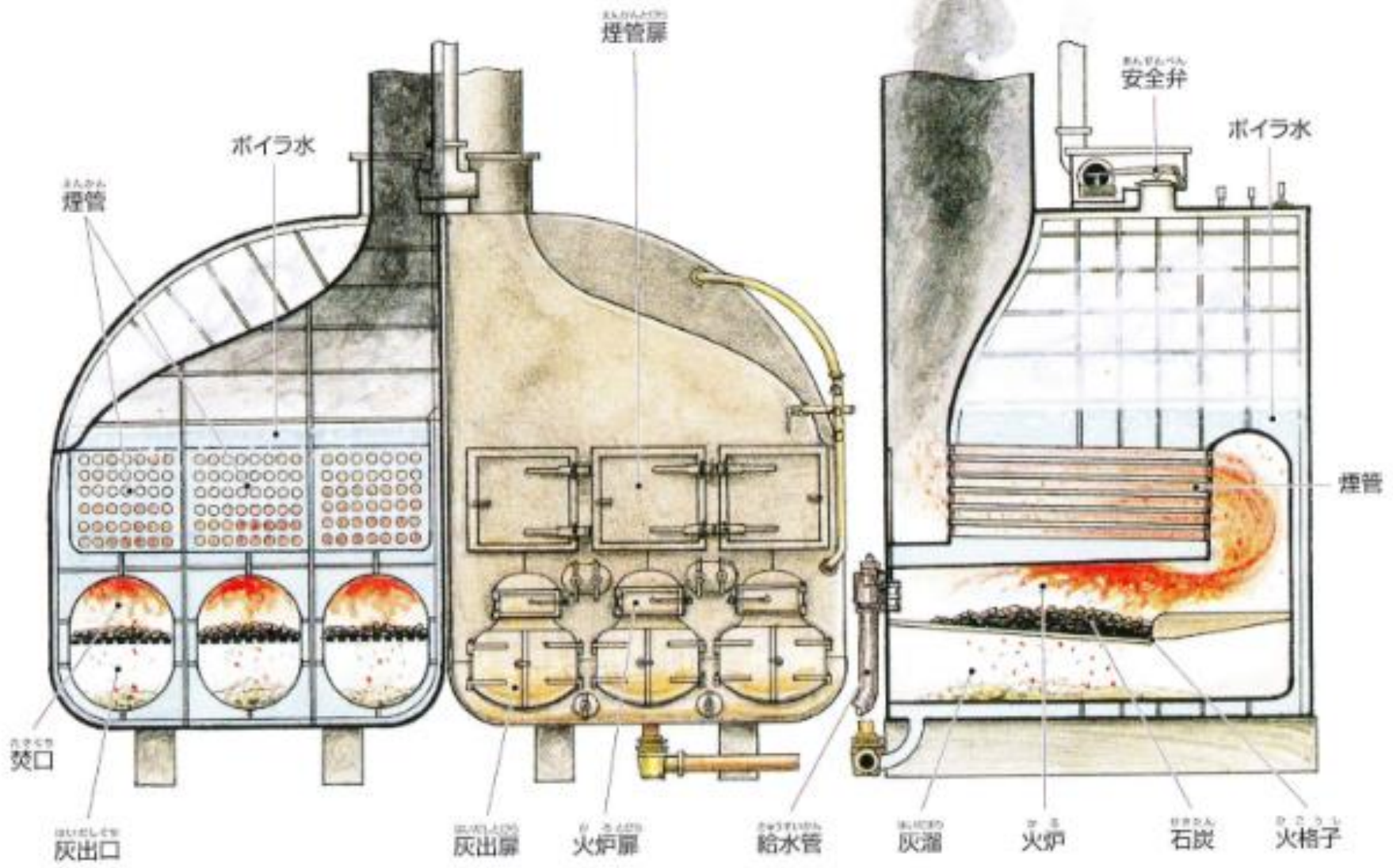
- ⑬ 士官室 (中央)
- ⑭ 火薬庫
- ⑮ ライフボート (救命艇) 両舷
- ⑯ スカイライト (天窓)
- ⑰ 乗降階段

- ⑱ 蒸気機関 (2気筒)
- ⑲ 乗降階段
- ⑳ 30ポンドカロネード砲
- ㉑ スカイライト (天窓)
- ㉒ 士官居室 (両舷)

帆走する時は
スクリューを船内
に取り込むように
なっていました。



咸臨丸に搭載されていたものと同型の鉄製煙管式ボイラーの構造図。左が正面図、右が断面図



咸臨丸に搭載されていたものと同型の、蒸気機関構造図。ボイラーで作られた蒸気がシリンダーに導かれてピストンを動かし後、復水器に導かれ冷やされて水に戻り再びボイラーに戻ります。

